【フォーラム】

肯定の意味素性指定を受けたNegPと形式動詞の挿入について

平　田　一　郎

専修大学／カリフォルニア大学サンディエゴ校

【要旨】英語のdo挿入や，日本語の「する」挿入によって現れる要素は，それ自身では意味を持たない形式的な動詞であると広く考えられている。また，こうした形式動詞の挿入は，ある種の形態的要請からなされると仮定されている。本稿では，一見形態的要請を持たないような「する」挿入の例を指摘し，同時にそのようにして現れた「する」が，意味解釈にも変更をもたらしているように見えることを示す。そしてそのような「する」挿入を，意味素性として「肯定」の指定を受けた主要部Negを想定することで説明することを試みる*。

キーワード：「する」挿入，do挿入，等位接続，NegP，主要部移動

1. はじめに

日本語では，複合述語の間に助詞が介在すると，形式動詞「する」が挿入されることがある（殴られる／殴られもする）。従来こうした「する」は，複合述語のうち後続する述語の形態的要請を満たすために挿入される，意味的には空の形式動詞であると考えられてきた。この研究では，これまでに論じられてこなかった，一見後続する述語が見あたらないような「する」挿入の例，及び一見「する」挿入によって意味に変更が加わっているように思える例を示す。そしてこれらの「する」挿入と，それに関連する一連の事実を，音声的に空で，［-NEG］の素性を持つ主要部Negを仮定することにより説明することを試みる。

2. 助詞と「する」挿入

日本語では，動詞と時制辞の間に助詞「も」「さえ」「は」などが介在すると，形式動詞「する」が挿入されることが広く知られ，Kuroda（1965）以降，生成文法の枠組みで盛んに議論されてきた（Nakau 1973, Miyara 1991, Kageyama 1992, Miyagawa 1998, Nishiyama and Cho 1998, Aoyagi 1998, 青柳 2006, Sakai 1998など）。（1）が助詞の介在しない形，そして（2）が助詞が介在し「する」挿入が起こった形である。

（1）　ゴリラがリンゴを食べる.

* 本稿を仕上げるにあたり，2人の査読者の方々からのコメントが大変有益であった。ここに感謝の意を記したい。

(2)　a.　ゴリラがリンゴを食べもする.
　　b.　ゴリラがリンゴを食べさえする.
　　c.　ゴリラがリンゴを食べはする.

この現象は，英語のいわゆる Affix Hopping が否定辞によって阻害された場合に，T 位置に do が挿入される (3) の現象と平行する現象であると長らく考えられてきた。

(3)　a.　The gorilla eats apples.
　　b.　The gorilla does not eat apples.

どちらの場合も，動詞と時制辞との関係が，それぞれ介在する助詞，否定辞によって阻まれるため，T 位置に形式動詞である「する」と do が挿入されると考えるわけである。

しかし Miyagawa（1998）は，日本語の「する」挿入を促す要素が時制辞に限られないことを観察する。

(4)　a.　食べ始める
　　b.　食べ続ける
　　c.　殴られる
(5)　a.　食べもし始める
　　b.　食べもし続ける
　　c.　殴りもされた

(4) のような複合述語の後続要素「始める」「続ける」「れる」などに対しても，先行する述語との間に助詞が介在すると，(5) のように「する」挿入が行われる。したがって，より一般的に（T に限らず），形態的選択素性として，先行する動詞的要素を要求する述語と，その選択素性を満たす先行する動詞的要素との間に助詞が介在すると，後続する述語の選択素性を満たすために形式動詞の「する」が挿入されると考えることができる（詳しくは Miyagawa 1998, Aoyagi 1998, 青柳 2006, Sakai 1998 らの研究を参照されたい）。以降，このような複合述語のうち，先行する動詞的要素（動詞的性質は［+V］素性で表すことにする）を必要とする述語を後続述語，後続述語の選択素性を満たす［+V］素性を持つ述語を先行述語と呼ぶこととする。

3. 述語等位接続構造に関連する 3 つの問題点

しかし一見このようには説明できないように思える「する」挿入の事例が，述語の等位接続構造で見られる。Takano (2004) は，(6) のような構文が（表示のように）等位接続構造を形成していることを，Carlson（1987）の研究に基づいて示した[1]。

(6)　a.　ゴリラがリンゴを [拾い] & [食べ] た.
　　b.　ゴリラが [リンゴを食べ] & [水を飲ん] だ.

[1] Takano（2004）の研究に注意を向けて下さった査読者に感謝したい。

「&」で表示した部分には，実際は音声が現れないが，これが接続詞の役割を果たして等位接続を形成していることは，「違う」「異なる」「別々の」などの表現により証明することができる。ここでは「別々の」を例にこれを見る。(7) の各々の文では，場所格の付加詞表現に「別々の」が含まれている。

(7)　a.　ゴリラとキリンが別々の部屋で寝た.
　　b.　*(1 頭の) ゴリラが別々の部屋で寝た.

(7a) では，「と」による等位接続構造によって，主語の「ゴリラ」と「キリン」が「別々の」が指示する 1 つ 1 つの対象となっているために，適切な意味解釈が得られ，文法的となる。(7b) では，「別々の」が指示すべき（複数の）対象が文中に見つからないため，適切な解釈が得られず非文となっている（「別々の」は，同じ文中にそれが指し示すことのできる複数の対象が見つかる場合にだけ使える表現である）。このように「別々の」が文中に現れるか否かで，当該文に等位接続構造があるかどうかを調べることができる（詳しくは Carlson 1987, Takano 2004 を参照のこと）。

この性質を利用すると，(6) のような文も確かに等位接続構造を形成していることがわかる。

(8)　a.　別々のゴリラが [遊び] & [寝] る.
　　b.　別々のゴリラが [リンゴを食べ] & [水を飲ん] だ.

(8a) では，あるゴリラが遊び，それとは別のゴリラが寝るという解釈が可能だ。また (8b) ではリンゴを食べたのとは別のゴリラが水を飲んだという解釈が可能で，どちらの例も確かに等位接続構造を含んでいることがわかる。このような例でも，音声的実現のない「&」の代わりに「そして」を用いると，「別々の」の解釈が難しくなる。

(9)　a.　*別々のゴリラが [遊び] そして [寝] る.
　　b.　?*別々のゴリラが [リンゴを食べ] そして [水を飲ん] だ.

「そして」があるこれらの例では，同じゴリラが引き続いて 2 つの動作をしたという含意が強くなる。その結果「別々の」が指すことができる複数の対象（これらの場合，遊んだり，寝たりする動作）が文中で確保されないため，非文となっている。したがって「そして」を含まない，音声的実現のない「&」によって連結された述語だけが，確かに等位接続構造を含んでいると考えることができる。

「&」による構造が等位接続であることは，等位構造制約によっても確認することができる。

(10)　a.　*リンゴ$_i$ を ゴリラが [水を飲み] & [t_i 食べ] た.
　　b.　*[ゴリラが [t_i 飲み] & [リンゴを食べ] た] 水$_i$

(10a) では，& によって接続された右の等位節（以降，等位接続構造で連結されている左右の節を「等位節」と呼ぶ）からだけ，「リンゴを」がかき混ぜ規則を受け

て非文となっている。また（10b）では，左の等位節からだけ関係詞化が行われ，これも非文である[2]。この点でも「&」による述語接続は，等位接続構造をなしていると考えることができる。

これらを念頭に例文（11）の「する」挿入を検討する。

（11）　a.　ゴリラが [リンゴを食べもし & 水を飲みもしな] い.
　　b.　ゴリラが [リンゴを食べさえし & 水を飲みさえしなかっ] た.

（11）では「&」で等位接続された，左右の等位節内で「する」挿入が起こっている。右の等位節の「飲みも／さえ」の後には，後続述語として否定辞「な（い／かった）」があるから，右の等位節内の「する」挿入は従来通り，否定辞の持つ［+V］の選択素性を満たすために適用されていると説明することができる。しかし左の等位節内には「する」挿入を促す後続述語が一見見あたらず，なぜここで「する」挿入が適用されているのか不明である。これが第 1 の問題点である。

さらに，こうして挿入された「する」は，意味解釈にも差をもたらす。（11）とほとんど同じ語彙を使いながら，意味解釈が（11）とは決定的に異なる（12）の例を考察する。

（12）　a.　ゴリラが [リンゴを食べも & 水を飲みも] しない.
　　b.　ゴリラが [リンゴを食べさえ & 水を飲みさえ] しなかった.

（12）は，（11）の各文の左の等位節から「し（する）」を省いただけの例文である。「する」挿入が左の等位節内で起こっている（11）では，左の等位節が，時制辞前の否定辞「な（い）」のスコープから外れ，「ゴリラがリンゴを食べた」という解釈になる。逆に（12）の左の等位節は，否定辞のスコープに入っており，「ゴリラはリンゴを食べていない」と解釈される。広く認められているように，「する」が意味的に空の形式動詞であるとするなら，なぜ左の等位節に「し（する）」がある（11）とない（12）とで否定のスコープが異なるのか不明である。

両者の否定のスコープの違いは，否定極性項目の認可の違いによってもさらに明確に示すことができる[3]。（13a）のように，（11b）の目的語を否定極性項目に置き換えると，左の等位節内の否定極性項目が認可されずに非文となる。

---

[2]（10b）のような例で，左右の等位節を入れ替えると容認性が上がる（査読者の指摘による）。

（i）?[ゴリラが [リンゴを食べ] & [t_i 飲ん] だ]] 水 $_i$

これは，等位節同士に時間的な推移が含意される場合，（（ii）のように）後続する等位節からの抜き出しが可能になるという等位構造制約の一貫した例外として説明される。

（ii）This is the book which$_i$ I [went to the store and bought t_i].

（10a）の例でも，「リンゴを食べてから水を飲んだ」という含意を読み込んで解釈した場合，（i）と同じように容認性が上がると思われる。このような等位構造制約の例外に関しては，Ross（1967）や Lakoff（1986）を参照されたい。

[3] 査読者の指摘による。

(13)　a.　*ゴリラが [何も食べさえし & 何も飲みさえしなかっ] た.
　　b.　ゴリラが [何も食べさえ & 何も飲みさえ] しなかった.

これに対し，(12b) の目的語が否定極性項目となった (13b) は文法的で，両者の否定辞の作用域に違いがあることがはっきりとわかる。これが 2 つめの問題点である。

さらに，(14) の例文の解釈を考える。

(14)　a.　ゴリラが [リンゴを食べ & 水を飲まな] い.
　　b.　ゴリラが [リンゴを食べ & 水を飲まなかっ] た.

(14) の文では，左右どちらの等位節内でも助詞の介在や「する」挿入は起こっていない。問題はこれらの文の解釈である。(14) の文の左の等位節は，時制辞前にある否定辞「ない」のスコープから外れている。言い換えれば，(14) の各文の左の等位節は，(11) と同じように「ゴリラがリンゴを食べた」という解釈を持ち，(12) のように左の等位節が否定辞のスコープに入った「ゴリラがリンゴを食べない」という解釈にはならない[4]。これもなぜそのような解釈だけが許されるのか説明が必要である。(14) の左の等位節に否定のスコープが及んでいないことは，再び否定極性項目がそこで認可されないことからも確認することができる。

(15)　a.　*ゴリラが [何も食べ & 何も飲まな] い.
　　b.　*ゴリラが [何も食べ & 何も飲まなかっ] た.

このように，述語の等位接続構造は，「する」挿入と否定のスコープとの相互作用から 3 つ問題を提起することになる。

(11) では，「する」挿入の起こった等位接続構造の左の等位節が否定のスコープから外れるとの観察をした。しかし，同じ述語の等位接続構造でも，条件節内であると，左の等位節が否定のスコープに入った解釈が可能となる話者もいるようである（査読者の指摘による）。

(16)　a.　大学では，学びもし，遊びもしないと，卒業するときに後悔することになる.
　　b.　ミュージカルでは，歌いもし，踊りもしないと，観客は喜ばない.

そうした話者は，(16a) で「学びもし」と「遊びもし」の両方が否定される解釈が可能で，(16b) でも，「歌いもし」と「踊りもし」が同時に否定のスコープに入るという直感があるようである。また「する」挿入が起こらなくても，そうした話者

[4] Kato (2006) の観察による。Fukushima (1999) は，(14) のような場合に等位接続構造全体が否定されうるという判断を示している。本論では，(14) で右の等位節だけが否定されうるという直感を持つ話者に限定して議論をする。Kato (2006: Chapter 4) の議論も参照されたい。なお，歴史的に，上代，中古，近世の時代に (14) のような形で両否定が可能であったことが橋本 (1948)，橘 (1952)，此島 (1967)，山口 (1987)，佐佐木 (1999) 等で指摘されている。

は，（16c）のような例で「水を飲み」と「食物を取ら」の両方を否定する解釈が得られるようである．

（16）　c.　私たちは，水を飲み，食物を取らないと，死んでしまう．

これは同査読者が指摘するように，プロソディーの切れ目と関連があると考えられる。（11）のような主文での等位接続の場合，等位接続の「&」の部分に大きなプロソディーの切れ目が現れる。これに対し，（16）のように等位接続がさらに条件節に埋め込まれると，プロソディーの切れ目は，条件節末尾に置かれる傾向がある。プロソディーの切れ目を▒で示すと，両者の違いは（17）のように表すことができる。

（17）　a.　ゴリラが [リンゴを食べもし▒&▒水を飲みもしな] い
　　b.　[歌いもし & 踊りもし] ないと▒観客は喜ばない

（17a）では，プロソディーの切れ目が等位接続の中心にあって，この場合は統語構造がそのまま解釈に反映されていると仮定してはどうか。そのために「食べもし」は文末の時制辞にかかる解釈だけが可能となる。これに対し，（17b）では，接続されている「歌いもし」と「踊りもし」が大きなプロソディーの切れ目で分断されることがない。そのため，これらが全体として（いわば音声的に再分析されて）等位接続構造を形成し，「ない」にかかる読み方が可能となるのではないだろうか[5]。以下では，（11）のような例文で，左の等位節が否定のスコープから外れるという解釈が，統語構造を直接的に反映していると仮定して議論を進めることとする。

4. NegP による解決法

この節では，前節で提示した 3 つの問題を，NegP 投射を利用することにより解決することを試みる。

通常，NegP は否定辞が現れる場合にだけ投射されると（暗黙のうちに）仮定されている。これに反し，日本語には音声形式を持たない［-NEG］指定の主要部 Neg があり，これが［+V］の先行述語を必要とする後続述語（Ø と表記する）であると仮定してはどうだろうか[6, 7]。［+NEG］指定の主要部である Neg「な（い）」

[5] この考えを理論化するためには，プロソディーのような音声的な側面が，意味解釈（LF での解釈）に影響を持ちうるよう言語産出の仕組みを設定する必要がある。また，（17）のどちらか一方の構造が「標準」で，他方が再分析によって派生されるという方法以外にも，（17）の両構造を（音声的な側面を加味した上で）直接生成できるよう，統語部門を精密化させるという方法も考えられる（Deguchi and Kitagawa（2002），Ishihara（2003），Kitagawa（2005）などのアプローチが参考になる）。

[6] Laka（1990），Frampton（1991），Akahane（2006, 2008）は，肯定文でも（［-NEG］素性の主要部を持つ）NegP が投射されるとの主旨の提案をしている。本研究の指摘する言語データと議論はこれらの提案を支持することになる。

[7] 日本語の否定辞が NegP によって導入されるとする分析については，Takahashi（1990），Aoyagi and Ishii（1994），Nishioka（1994），Yoshimoto（1998），Watanabe（2004），Han, Storoshenko, and Sakurai（2005），Kishimoto（2007）などの先行研究がある。

は語彙動詞の後に現れる（食べ-な-い）。同じように日本語に［-NEG］指定の Neg（Ø）があり，これも語彙動詞の後に現れるとすると，（11）の各例文の左の等位節内で，動詞に後続する形で Ø が挿入されていると考えることができる。

（18）　a.　… 食べも Ø
　　b.　… 食べさえ Ø

［+NEG］の主要部 Neg は，［+V］指定の先行述語を要求する後続述語であるので（「食べさえ-し-ない」のように助詞の介在で「する」挿入が適用される），［-NEG］指定の Ø も，同様の後続述語であると考えられる。しかし（11）/（18）では，先行する語彙動詞が，［+V］素性は持っていないと考えられる助詞を伴っており，後続述語 Ø の持つ［+V］指定を満たす先行述語にはなりえない。そこで，「する」挿入が適用されて（19）の形となる[8]。

（19）　a.　…[$_{NegP}$ … 食べも し-Ø] & [$_{NegP}$ … 飲みも し-な] T
　　b.　…[$_{NegP}$ … 食べさえ し-Ø] & [$_{NegP}$ … 飲みさえ し-なかっ] T

右の等位節内では，これとは別に［+NEG］の否定辞「な（い）」が［+V］指定の先行述語を必要とし，「する」挿入が適用されている。（19）では，左の［-NEG］の NegP と，右の［+NEG］の NegP が等位接続構造をつくり，全体が T に支配される形となるので，左の等位節は肯定の解釈となる，と説明することができる。音声的に空の Ø を想定することは，「する」挿入を促す形態素の必要性と，［+NEG］の「な（い）」を主要部とする投射と等位接続構造を形成しうる投射の必要性，およびそれに基づく適切な解釈を保障する必要性という 3 点から動機づけられている。

一方，（12）では，左の等位節が VP までしか投射されていない（［-NEG］の Ø を挿入するなら，これに引き続いて「する」挿入が適用されるはずである）。また，右の等位節内でも，語彙動詞に助詞が付随することで，語彙動詞と［+NEG］の主要部 Neg との併合が阻止される。そこで（12）は（20）のような，VP&VP の等位接続構造が NegP に支配される形となり，両等位節の一律的な否定の解釈が行われるのである。

（20）　a.　…[$_{NegP}$ [$_{VP}$… 食べも] & [$_{VP}$… 飲みも] しな] い
　　b.　…[$_{NegP}$ [$_{VP}$… 食べさえ] & [$_{VP}$… 飲みさえ] しなかっ] た

最後に，（14）の解釈を考える。（14）の各文は，（11）と同じく，そして（12）

[8] 英語の Affix Hopping でも，音声的に空の T 要素を仮定する必要がある場合がある。

（i）　a.　The gorillas [$_T$ e] eat apples.
　　b.　The gorillas do-[$_T$ e] not eat apples.

（ia）では，［$_T$ e］で表示した T 要素は明らかに音声的具現を持たない。それでも（ib）のように not によって［$_T$ e］と eat の関係が阻害されると，［$_T$ e］を救うために do が挿入される。［$_T$ e］の存在を T 位置に仮定しなければ，この do 挿入を説明することはできない。

と異なり，左の等位節が時制辞前にある否定辞のスコープから外れて，「ゴリラがリンゴを食べる／た」という解釈になるのであった。この観察は，［-NEG］指定の主要部 Ø が後続述語であるという仮説から自然に帰結する。（14）の左の等位節に動詞が挿入され，続いて Ø が挿入されると（21a）が派生される。

（21）　a.　…[$_{NegP}$ [$_{VP}$… 食べ] Ø] & …

先行述語「食べ」は，（主要部移動によって）後続述語「Ø」と併合し，その選択素性［+V］を満たす[9]。すると（21b）が派生される（右の等位節内でも後続述語である「な（い）」と先行述語「飲ま」が同様の併合を受ける）。

（21）　b.　…[[$_{NegP}$ [$_{VP}$…t] 食べ-Ø] & [$_{NegP}$ [$_{VP}$…t] 飲ま-な]] T

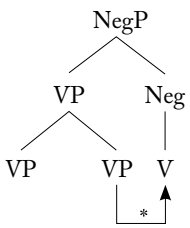
左の等位節は右とは独立して［-NEG］の NegP を投射しているので，（11）と同じく右の等位節だけが否定辞のスコープに入る解釈が得られるのである。

（14）の左の等位節に［-NEG］指定の主要部 Ø が挿入されないとどうなるであろうか。そうすると（22a）のように，VP & VP の構造が Neg の下にできる（すなわち両否定の可能性が出る）。

（22）　a.　…[$_{NegP}$[$_{VP}$[$_{VP}$… 食べ] & [$_{VP}$… 飲ま]] な] T

しかし，T の直前にある否定辞「な（い）」は明らかに後続述語である（飲みさえ-し-ない）。したがって，先行述語の「飲ま」は主要部移動によって「な（い）」と併合する。しかし，この操作は，VP&VP の等位接続の右側からだけ動詞が Neg 位置へと繰り上がることになり，これは明確な等位構造制約違反である[10]。

（22）　b.



[9] V と Neg との併合が，統語的主要部移動によってなされると考えることについては，以下の議論と注 10 を参照のこと。

[10] Takano（2004）は，（i）のような［V & V］T の構造において，右の V「ファイルし」と時制辞「た」の併合が（統語部門での主要部移動ではなく）PF 部門での形態的融合によって行われると主張する（形態的融合については, Marantz（1988), (1989), Halle and Marantz（1993）を参照のこと）。

（i）　論文を [$_{V}$ コピーし & ファイルし] た

この併合は明らかに等位構造制約を違反する。しかし，これは，PF 部門の操作なので統語的な制約がかからない（と仮定されている）。この議論に照らし合わせて考えると，ここで想定している V と Neg との併合は，（等位構造制約に制限されるので）統語部門での主要部移動であるということになる。

したがって（14）のタイプの等位構造を作るには，左の等位節に［-NEG］指定の主要部 Ø を挿入し，両等位節を NegP にまで投射させた上で T の下で連結するしかないのである。左の等位節に［+NEG］指定の主要部「ず（ない）」を挿入することで NegP まで投射させ，右の NegP と連結することはもちろん可能である。この場合は，右の NegP は［+NEG］でもいいし，［-NEG］でもいい[11]。

(23)　a.　ゴリラが [$_{NegP}$ [$_{VP}$ リンゴを t] 食べ-ず] & [$_{NegP}$ [$_{VP}$ 水は t] 飲-Ø] む.
　　b.　ゴリラが [$_{NegP}$ [$_{VP}$ リンゴを t] 食べ-ず] & [$_{NegP}$ [$_{VP}$ 水も t] 飲ま-な] い.

このように，［-NEG］指定の NegP が VP の上に投射されると仮定し，また（助詞に移動が妨げられない場合）V-to-Neg 移動が起こると仮定することによって，前節で提示した 3 つの問題が解決されることになる。

5. TP による代案

4 節では，NegP による問題解決の道を模索した。この節では，音声的に空の T を想定することによる代案を検討する。

Tomioka（1993）は，(24a）のように，述語等位接続構造の左の等位節内に「昨日」のような時の副詞が現れることから，これが（見かけに反し）TP（IP）の等位接続であると主張する。

(24)　a.　太郎が 昨日ここに着き & 明日ここを発つ.
　　b.　[$_{TP}$ 太郎 $_{i}$ が昨日ここに着き [$_{T}$ e]] & [$_{TP}$ pro$_{i}$ 明日ここを発つ].

この考えによると（24a）は，(24b）のような構造を持つことになる。(24b）では，左右それぞれの等位節が TP まで投射し，左の TP の主要部には音声的に空の時制

---

[11] 日本語の否定辞は，助動詞系の「ぬ」が，形容詞系の「ない」に取って代わられるという変化の最中にある（小林 1968)。また，述語が動詞の場合と，形容詞，形容動詞，名詞 + 断定の助動詞の場合とで否定辞「ない」の性質が大きく異なることも知られている（Kato 1985, 日本語記述文法研究会編 2007 など)。例えば，動詞と否定辞の間に助詞が介在すると形式動詞の挿入が適用されるが，形容詞などと否定辞の間では，そのようなことが起こらない。

(i)　a.　食べも * （し)-ない
　　b.　美しくも (*し)-ない

もう 1 つの違いとして，述語等位接続構造の左の等位節での形態（連用中止法での形態）が挙げられる。動詞否定の場合は，助動詞「ぬ」を起源とする「ず」が用いられる。

(ii)　a.　… 食べず & …
　　b.　… 食べもせず & …

形容詞等の否定では，形容詞派生の「ない」が用いられる。

(iii)　… 美しくなく & …

助動詞系「ぬ」から形容詞系の「ない」への変化が進行中であることは，動詞否定の連用中止法でも「ない」が使われ始めていることからも伺える（金沢 1997)。本研究では，動詞述語（の否定）の場合に限って議論することとする。

辞［$_{T}$ e］が生成されている。左右の等位節で別の時制を指定する副詞が用いられているが，左の等位節の「昨日」は［$_{T}$ e］によって，そして右の等位節の「明日」は現在時制の「発つ」によって認可されると説明することができる。（あるいは時の副詞がそれぞれの等位節の T の値を指定していると説明することができる。理論の詳細は Tomioka 1993 を参照されたい。）3 節で見た 3 つの疑問は，この TP 分析によっても解決することが可能である。

例えば，（11）では，一見動機付けを持たない「する」挿入が，述語等位接続構造の左の等位節で観察されることを指摘した。TP による分析では，（Ø の代わりに）音声的に空の［$_{T}$ e］が左の等位節にあって，これが「する」挿入の適用を促していると説明することができる。

（25）　[$_{TP}$ ゴリラ $_{i}$ がリンゴを食べも し-[$_{T}$ e]] & [$_{TP}$ pro$_{i}$ 水を飲みもしない].

（25）では，左の等位節内に［$_{T}$ e］が現れ，これが後続述語として，［+V］の先行述語を要求する。しかし，先行述語には助詞「も」が付加されているため［$_{T}$ e］の選択素性を満たすことができない。そのために「する」挿入が適用され，これにより［$_{T}$ e］の選択素性が満たされる。右の等位節は，左の等位節とは独立した TP なので，主語位置には pro が現れている。左右の等位節がそれぞれ TP まで投射されていて，左の等位節は右の TP 等位節内部にある否定辞のスコープに入ることがない（左の等位節内に［-NEG］指定の NegP 投射の存在を仮定する必要もない）。このように，空の T を左の等位節に想定することによっても，問題となっているパラダイムが説明される可能性がある。

しかし，この TP による分析には，いくつか（NegP 分析にはない）問題点がある。まず，[$_{T}$ e] を想定する根拠となっている，過去-未来を組み合わせた（24a）の例文は，「別々の」によって調べると純粋な等位接続ではないことがわかる。

（26）　?? 別々の学生が 昨日ここに着き & 明日ここを発つ.

（26）では，ある学生が「昨日ここへ到着」し，それとは別の学生が「明日ここを出発」することが，述べられているが，その解釈は得難い。逆に「昨日ここへ到着し，その後明日ここを出発する」という（一連の出来事としての）解釈をすると「別々の」が指すことのできる複数の出来事が文中に見つからず，どちらにしても非文となる。これは「そして」を用いた等位接続で「別々の」が用いられないことと平行の関係にあるようだ（（27）= （9））。

（27）　a. *別々のゴリラが [遊び] そして [寝] る.
　　b. ?*別々のゴリラが [リンゴを食べ] そして [水を飲ん] だ.

（26）と同様に過去-未来を組み合わせた等位接続でも，（28a）のような例の場合，「別々の」の適切な解釈が得やすいとの指摘を査読者からいただいた。

(28)　a.　(??) この部屋では別々の研究者が，昨日は物理の実験をし，明日は生物の実験をする.
　　b.　この部屋では別々の研究者が，一昨日は物理の実験をし，昨日は生物の実験をした.
　　c.　この部屋では別々の研究者が，明日は物理の実験をし，明後日は生物の実験をする.

確かに（28a）は，（26）に比べ容認性の程度が高いと思われる。それでも，過去-過去の組み合わせの（28b）や，未来-未来の組み合わせの（28c）よりは「別々の」の解釈が難しいように感じられる（あるいは文自体がぎこちなく感じられる）。（28a）や（26）では，過去の出来事と未来の予定というやや性質が異なる 2 つの等位節に「別々の」が意味的に連絡する必要がある。このことがこれらの例文の容認性を下げていると考えられる。（26）の例でも，等位節をどちらも過去の出来事にするか，どちらも未来の予定にすることによって，ほぼ完全に容認可能な文となる。

(29)　a.　別々の学生が 一昨日ここに着き & 昨日ここを発った.
　　b.　別々の学生が 明日ここに着き & 明後日ここを発つ.

したがって，やはり過去-未来の組み合わせの接続構造は純粋な等位接続ではない可能性が高いと思われる。

むしろ (24a) のように過去-未来の時制が連続した接続構造の例は，(30) のような，時間的推移と因果関係が等位節同士の間で含意される例の 1 つと考えることができそうである。

(30)　太郎が 酒屋に行き & ビールを買った.

(30) では，まず太郎が酒屋に行き，そしてその酒屋でビールを買ったという含意がある。(30) のような例でも，(26) と同様「別々の」は認可されにくい。

(31)　?? 別々の学生が 酒屋に行き & ビールを買った.

(31) は，「酒屋に行った」ことと「ビールを買った」ことを（同時に起こった）別の出来事としてとらえることは可能であるが，「行った酒屋でビールを買った」と解釈することは難しい[12]。

また，通常の述語等位接続構造では，論理的意味を変更することなく左右の等位節を入れ替えることが可能である。

(32)　a　ゴリラが リンゴを食べ & 水を飲んだ.
　　b.　ゴリラが 水を飲み & リンゴを食べた.（= (32a)）

[12] (26) の場合，「昨日到着した」ことと「明日出発する」ことは同時には起こりえないため，2 つの別々の出来事として等位節を解釈することすら難しいものと思われる。

しかし，時間的推移が等位節同士で含意される等位接続の場合，等位節を入れ替えることができない。

(33)　a. ??太郎が ビールを買い & 酒屋へ行った.（≠(30)）
　　b.　*太郎が 明日ここを発ち & 昨日ここに着いた.

(30) の等位節を入れ替えた（33a）では，(30) の持つ「酒屋へ行き，その酒屋で引き続きビールを買った」という一連した出来事の読みは失われる。(24a) の左右の等位節を入れ替えると（33b）となるが，これはもはや容認不可能である。これらの観察から，(24a) の左の等位節は，(TP 理論で想定されているように，[T e] と時の副詞によって）独立して時制指定を受けているというよりも，「&」の連結によって言い表される一連の行為の前半部分を陳述していると解釈することがより適切であろう[13]。

以上のように，TP による分析は，本研究で問題としている 3 つの疑問を解決する可能性がある一方で，いくつかの疑問点も残す。等位接続構造では，時として左右の等位節が時間的に連続した 1 つの出来事を表すことがある。TP 分析の動機付けとなる（24a）は，等位接続が（対等の等位節を連結するのではなく）連続した一連の出来事を表している例と考えることもできる。そうだとすれば，(24a) の例は必ずしも音声的に空の [T e] を想定する根拠にはならないことになり，TP による問題解決も説得力を失うことになる。

6. まとめ

「する」挿入と等位接続構造に関係する 3 つの疑問に対し，NegP を利用した分析の可能性と，（代案として）TP を利用した分析の可能性を検討した。NegP による解決がより一貫性があると考えたが，明確な結論を出すにはさらなるデータの積み重ねと理論の精密化が必要であろう。また，上で検討した以外にも，より優れた説明法があるかもしれない。本研究の問題提起が「する」挿入現象と述語等位接続構造の解明に多少なりとも貢献することを期待したい。

---

[13] 次のような対比は TP による問題解決を支持する証拠となるかもしれない（査読者の指摘による）。

(i)　a. ?*太郎が 昨日ここに着きも & 明日ここを発ちも する.
　　b.　太郎が 昨日ここに着きもし & 明日ここを発ちもする.

(ia) は VP & VP の接続であるが，左の等位節の時制指定「昨日」と，文末の現在時制形態素「する」が一貫していないために非文となっている。左の等位節でも「する」挿入が起こっている（ib）では，その問題が回避されている。TP による問題解決の理論によれば，(ib) の左の等位節内には [T e] があって，これが「する」挿入の適用を促していることになる。(ia) とは違い，(ib) では，この [T e] が副詞「昨日」を認可するために，時制の一貫性が保たれ，文法的となると説明することができる。

参　照　文　献

Akahane, Hitoshi (2006) Inner islands: A minimalist approach. *English Linguistics* 23: 315–346.

Akahane, Hitoshi (2008) Intervention effects in covert movement constructions. *Gengo Kenkyu* 133: 1–29.

Aoyagi, Hiroshi (1998) Particles as adjunct clitics. *Proceedings of the North East Linguistic Society* 28: 17–31.

青柳宏（2006）『日本語の助詞と機能範疇』東京：ひつじ書房.

Aoyagi, Hiroshi and Toru Ishii (1994) On NPI licensing in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 4: 295–311.

Carlson, Greg (1987) *Same* and *different*: Some consequences for syntax and semantics. *Linguistics and Philosophy* 10: 531–565.

Deguchi Masanori and Yoshihisa Kitagawa (2002) Prosody and *wh*-questions. *Proceedings of the North East Linguistic Society* 32, Volume 1: 73–92.

Frampton, John (1991) Relativized minimality, a review. *The Linguistic Review* 8: 1–46.

Fukushima, Kazuhiko (1999) Bound morphemes, coordination, and bracketing paradox. *Journal of Linguistics* 35: 297–320.

Halle, Morris and Alec Marantz (1993) Distributed morphology and the pieces of inflection. In: Kenneth Hale and Samuel Jay Keyser (eds.) *The view from Building 20: Essays in linguistics in honor of Sylvain Bromberger*, 111–176. Cambridge, MA: MIT Press.

Han, Chung-hye, Dennis Ryan Storoshenko, and Yasuko Sakurai (2005) Scope of negation and clause structure in Japanese. *Proceedings of the Thirtieth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society*: 118–129.

橋本進吉（1948）「国語の形容詞について」『国語法研究』橋本進吉博士著作集第２冊：84–113. 東京：岩波書店.

Ishihara, Shinichiro (2003) Intonation and interface conditions. Doctoral dissertation, MIT.

Kageyama, Taro (1992) Dummy *su*- and lexical *su*-: A reply to Miyara. *Gengo Kenkyu* 102: 165–174.

金沢裕之（1997）「助動詞『ない』の連用中止法について」『日本語科学』1: 105–113.

Kato, Takaomi (2006) Symmetry in coordination. Unpublished doctoral dissertation, Harvard University.

Kato, Yasuhiko (1985) Negative sentences in Japanese. *Sophia Linguistica* 19. Tokyo: The Graduate School of Languages and Linguistics/Linguistic Institute for International Communication, Sophia University.

Kishimoto, Hideki (2007) Negative scope and head raising in Japanese. *Lingua* 117: 247–288.

Kitagawa, Yoshihisa (2005) Prosody, syntax and pragmatics of *wh*-questions in Japanese. *English Linguistics* 22: 302–346.

小林賢次（1968）「否定表現の変遷」『国語学』15: 45–62.

此島正年（1967）「かげろふの夕を待ち」『国語研究』9: 17–27.

Kuroda, Shige-Yuki (1965) Generative grammatical studies in the Japanese language. Doctoral dissertation, MIT.

Laka, Itziar (1990) Negation in syntax: On the nature of functional categories and projections. Doctoral dissertation, MIT.

Lakoff, George (1986) Frame semantic control of the coordinate structure constraint. *CLS* 22, Part 2, *Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory*: 152–167.

Marantz, Alec (1988) Clitics, morphological merger, and the mapping to phonological structure. In: Michael Hammond and Michael Noonan (eds.) *Theoretical morphology: Approaches in modern linguistics*, 253–270. San Diego: Academic Press.

Marantz, Alec (1989) Clitics and phrase structure. In: Mark R. Baltin and Anthony S. Kroch (eds.) *Alternative conceptions of phrase structure*, 99–116. Chicago: Chicago University Press.

Miyagawa, Keiko (1998) The Japanese dummy verbs and the organization of grammar. *Japanese/Korean Linguistics* 7: 427–443.

Miyara, Shinsho (1991) On the insertion of /s/-form (*suru*) in Japanese. *Gengo Kenkyu* 99: 1–24.

Nakau, Minoru (1973) *Sentential complementation in Japanese*. Tokyo: Kaitakusha.

日本語記述文法研究会編（2007）『現代日本語文法 3：アスペクト，テンス，肯否』東京：くろしお出版.
Nishioka, Nobuaki (1994) Improper movement and polarity items in English and Japanese. *English Linguistics* 11: 1–28.
Nishiyama, Kunio and Eun Cho (1998) Predicate cleft constructions in Japanese and Korean: The role of dummy verbs in TP/VP-preposing. *Japanese/Korean Linguistics* 7: 463–479.
Ross, John R. (1967) Constraints on variables in syntax. Doctoral dissertation, MIT.
Sakai, Hiromu (1998) Feature checking and morphological merger. *Japanese/Korean Linguistics* 8: 189–201.
佐佐木隆（1999）『万葉集と上代語』東京：ひつじ書房.
橘純一（1952）「『平家物語』『徒然草』解釈上注意すべき語法」『解釈と鑑賞』27-8: 28–31.
Takahashi, Daiko (1990) Negative polarity, phrase structure, and the ECP. *English Linguistics* 7: 129–146.
Takano, Yuji (2004) Coordination of verbs and two types of verbal inflection. *Linguistic Inquiry* 35: 168–178.
Tomioka, Satoshi (1993) Verb movement and tense specification in Japanese. *The Proceedings of the West Coast Conference on Formal Linguistics* 11: 482–494.
Watanabe, Akira (2004) The genesis of negative concord: Syntax and morphology of negative doubling. *Linguistic Inquiry* 35: 558–612.
山口佳紀（1987）「各活用形の機能」山口明穂（編）『国文法講座 2』：1–36. 東京：明治書院.
Yoshimoto, Yasushi (1998) The strong [neg] feature of Neg and NPI licensing in Japanese. *Japanese/Korean Linguistics* 8: 529–541.

執筆者連絡先：
214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田 2-1-1
専修大学文学部英語英米文学科
hirata@isc.senshu-u.ac.jp

［受領日　2009 年 2 月 27 日
最終原稿受理日　2009 年 11 月 25 日］

Abstract

[-NEG] NegP and Dummy Verb Insertion

Ichiro Hirata
Senshu University/University of California, San Diego

It is a widely held view that the elements appearing in the context of *do*-insertion in English and *suru*-insertion in Japanese are dummy verbs with no semantic content. The background assumption is that certain morphological requirements trigger the insertion operations. This article provides some cases of *suru*-insertion where no clear morphological motivation is found for its application. We show that *suru* in those cases seems to play a semantically substantial role. An attempt is made to account for *suru*-insertion of this kind by postulating a Neg head which has a [-NEG] feature.